

<p>校長室だより</p> <h1 style="text-align: center;">共学共高</h1>	<p>第 20 号</p>	<p>令和4年3月7日発行</p> <p>発行責任者 白梅学園高等学校長 武内 彰</p>
---	-----------------------	---

56期生の旅立ち～卒業式

3月5日（土）穏やかな晴天の下、そして正門わきの白梅や紅梅が花を咲かせる中、卒業生たちの旅立ちの日を迎えた。

前日の予行の際もそうであるが、生徒たちの式に臨む態度は大変立派なものであった。予行の休憩時間の際は、いつものように友達同士で楽しそうに歓談する姿が随所で見られるが、予行中や式本番中は毅然として凛々しい態度で臨む姿が印象的であった。素晴らしい生徒たちをお預かりしていたのだと、あらためて感じ入る。

本校では、卒業証書授与は一人一人に手渡しすることが伝統となっている。校長の立場からすれば、なかなか大変なことではあるが、卒業生一人一人の表情を間近で見ることができるのは嬉しい。一人一人に「おめでとう」と声をかけると、はにかんだ表情をする生徒、笑みを浮かべる生徒、緊張がにじみ出ている生徒など、さまざまな生徒たちの姿がそこにある。私も、「この生徒とはこういった思い出があったな」と回顧しながら証書を手渡した。

式辞では、主に次のようなこととお話した。

- ① たった1年間のお付き合いではあったが、学校行事や授業等において、さまざまな思い出があり、みなさんの活動を微笑ましく見守ることができたこと。
- ② コロナ禍にあって最終的にはタフさが求められること。それは自分とかかわりのある人々とのつながりから得られるものであること。
- ③ 進路先で高い専門性を身に付けて、自らの幸福を追求するとともに、自らの資質・能力を世のため、人のために役立てること。

井原理事長先生からは、サミュエル・ウルマンの「青春」という詩の紹介と共に、次のようなご祝辞をいただいた。

- ① 学園で学んだ仲間との友情を一生の宝物として大切にすること。
- ② 学園で過ごした日々のすべてを糧として、力強く新しい世界に踏み出していってくれることを期待していること。
- ③ どのような世界に身を置こうとも、勇気と希望をもって、自惚れることなく、卑屈になることなく、前向きに堂々と自分の人生を歩むこと。

在校生送辞では、Iさんから「先輩たちの姿から様々学んだこと、行事での団結力や創造力、生徒会活動での姿を見習いたいこと、受験期の勉強に向かう姿から努力する大切さを示してくれたこと、自分たちが伝統を引き継ぎ発展させること」など、在校生代表としての思いや決意が述べられた。

卒業生答辞では、Oさんから「一人一人が個性を発揮して協力することの大切さを学んだこと、高い目標に向かって努力する環境の中で行事や学習に集中して取り組んだこと、コロナ禍にあって創意工夫をして取り組んだこと、部活動でお互いの強みを出し合うことの大切さ、将来の夢や決意、在校生への願い、教職員家族への謝辞」などが述べられた。

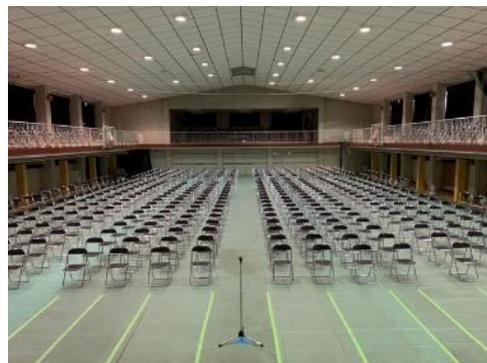
送辞・答辞ともに、それぞれの生徒の思いが詰まった立派な内容であった。

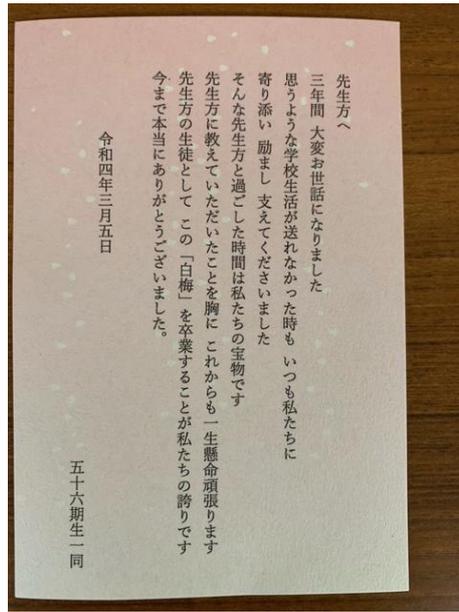
式後、オンラインによる生徒委員主催の謝恩会が開催された。委員生徒たちと教員は多目的ホールに集まり、その様子が3年生の各クラスにおいてライブ配信された。生徒たちから教員に対して、メッセージカード、お花、お礼の言葉が添えられたクッキーなどが贈られた。生徒の指名により、数名の先生たちからのメッセージが述べられ、一部が終了。二部では、教員はその場に残り、生徒及び3学年担任・副担任が作成したビデオやスライドを鑑賞。生徒たちはそれぞれの教室でクラス企画に臨んだ。謝恩会終了後も至る所で一緒に写真を撮る姿が見られ、名残惜しそうにしている卒業生たちの姿があった。私は、「生徒たちは本当に白梅が好きだったのだな」と心の中でつぶやいた。

結びに、卒業生のKさんが私に残してくれたメッセージを紹介したい。

「校長先生が授業の時に、なるべく対話の場を増やすようにしてくれたお陰で、一人でわからないことを悩まず友達に聞いたり、自分の意見を共有したりできるようになりました。4月からは自分の夢を実現できるように大学で精一杯頑張ります。」

私が白梅学園に着任した意義を卒業生の言葉から感じることができ、嬉しかった。





(共学共高とは：本校のディプロマポリシー（育てたい生徒像）の一つで、「共に学び、共に高め合う」生徒の姿を表す)